

日本語の道聞き談話における道順説明の構成要素 －母語場面と接触場面を比較して－

スケンデル＝リザトビッチ・マーヤ*

Structural Elements in Japanese Direction-Giving Discourse : A Comparison of Contact and Native Situations

SKENDER-LIZATOVIC Maja

Abstract

This paper focuses on structural elements of route-descriptions in Japanese direction-giving discourse. The aim is to shed light on the characteristics of contact and native situations. The results show that in native situations the amount of descriptives is only slightly lower than directives and is significantly higher than the amount of descriptives in contact situation. Furthermore, most of the directives and descriptives contain environmental features and modifiers, which provide additional information about them. The direction giver in the native situation tries to provide more information in order to increase the efficiency of the route-description. On the other hand, in contact situations the amount of directives was double the amount of descriptives. Other characteristics include using significantly fewer environmental features and modifiers than in contact situation. Here the direction giver focuses on providing only directives with direction designations, while using fewer structural elements such as descriptives, environmental features and modifiers in order to reduce the amount of information for the non-native direction seeker.

Keywords : route-description, structural elements, descriptives, delimiters, modifiers

1. はじめに

道を聞く場面は日常生活で頻繁に起こる場面の一つである。その場面の典型的な例として、一人の通行者（道を聞く側）がもう一人の通行者（道を教える側）に道順説明を聞き、道を教える側がその依頼を受けて道順説明を行う場面が挙げられる。そして説明が終わったら、道を聞く側が感謝し、話者がお互いに挨拶して会話が終了する。友達同士の雑談において特定の場所を説明するようなやりとりもあるが、本研究では前述した流れと構成の言語行動に着目し、その言語行動を「道聞き談話」と呼ぶことにする。

道聞き談話は様々な言語に共通して普遍性を持つ、複雑ではない言語行動であると一般的に認識されている。また、このような理由で外国語教科書ではよく道を聞く場面の会話が見られる。その上、多くの場合、文法項目や様々な語彙を紹介するために早い段階で導入されている。

しかし、道聞きは単純な言語行動ではない。道順説明を産出するためには、頭の中で道順のイメージを作るための認知的能力、そのイメージを一貫性のある談話にする言語的能力、または会話の相手に適した表現を使うための社会言語的能力など、いくつかの高度な能力が必要とされる (Scotton & Bernsten, 1988)。一方、道順説

キーワード：道順説明、構成要素、記述、区切り要素、修飾要素

*平成25年度生 比較社会文化学専攻

明を理解するためには、道を聞く側が道聞き談話の構成（説明を請うことから会話を終了させるまでの段階）、または内容（様々な情報、「指示の種類（directive types）」、様々な道順説明のストラテジーなど）を理解しなければならない（Scotton & Bernsten, 1988）。さらに、道聞き談話の対照研究においていくつかの普遍的な特徴が観察されたが、道順説明のストラテジーの選択や視覚的動詞の使い方などにおいて言語や文化による違いもあると報告されている（Strauss, Katayama & Eun, 2002; Taylor-Hamilton, 2004）。

道聞き談話の主な目的は対人関係の構築より情報交換であり（永田・大浜, 2011）、道順説明はその中心部分である。つまり、道順説明は情報から構成されており、聞き手である道を聞く側の主な関心は道順説明に現れる情報に向けられる（大浜ら, 1998）。母語場面の道順説明の構成要素について、認知心理学の分野では多くの研究がなされており、構成要素の種類や量によって道順説明の有効性に影響を及ぼすことが示唆された（Denis, 1997; Allen, 2000）。

外国語教科書では道を聞く場面が頻繁に見られるものの、外国語教育における道聞き談話、特に接触場面についての研究は非常に少ない。道を聞く側が母語話者でない場合、道を教える側が道順説明を相手に合わせると考えられる。つまり、道順説明の構成要素は変わる可能性があると考えられる。学習者が実際に体験するのが接触場面であるため、道聞き談話を授業で取り扱う時、自然会話の母語場面だけでなく、接触場面の研究から得た結果も考慮し、そこから指導を考える必要がある。

そこで、本研究は日本語の道聞き談話における母語話者同士の間で実際に行う母語場面の道順説明の構成要素だけでなく、日本語学習者が実際に体験する接触場面の道順説明の構成要素に着目する。

2. 先行研究

道聞き談話について、特に認知心理学や会話分析の分野などでは一連の研究が行われてきた。本節では、先行研究を母語場面に着目した研究と接触場面に着目した研究とに分けて紹介する。

2.1 母語場面の道聞き談話についての先行研究

母語場面の研究では道順説明の構成要素、または言語類型論の観点から分析を行った研究がある。

道聞き談話の構成要素を分析した研究として、英語母語場面の Psathas (1986) と、日本語母語場面の村上 (1996)、英語母語場面の Allen (1997)、日本語母語場面の大浜ら (1998) が挙げられる。

Psathas (1986) は道順説明の基本的な構成要素としていわゆる「操作 (operations)」を挙げている。「操作 (operations)」は順次に提示され、道を聞く側が行うべき移動や行動を明示的に「go (行く)」「turn (曲がる)」「get off (下りる)」などの移動や行動を示す動詞で表現される。また、「操作 (operations)」の連鎖はいくつかの発話にわたって、あるいは一つの発話 (ターン) の中で提示されるという。その移動や行動は道順の特定の場所で行われ、「操作 (operations)」の連鎖ではそれらの場所を指定するのが重要である。

村上 (1996) は道順説明の構成要素、それらの相互関係、およびそれらの連鎖を調べた。データは10組の友達同士による地図課題達成実験の談話資料である。分析の結果、地図上で方向参照地点として認知あるいは言及される地点には明らかな傾向があること、また道順説明の構成要素として基幹要素である「起点」、「着点」、「移動」と、副次的要素である「経路」、「方向」があることが明らかになった。またこれらの5つの構成要素の連鎖を見ると、2つの表現類型が認定できたと報告されている。

Allen (1997) は道順説明の構成要素の分類を提示した。Allen (1997) の分類はまず道順説明のすべての発話を行動や移動の動詞を含む「指示 (directives)」と、存在動詞「be (アル)」や視覚的動詞「see (ミル・ミエル)」を含む「記述 (descriptives)」に大別している。次に「指示 (directives)」と「記述 (descriptives)」に含まれている、道順に沿って現れる目印、経路、交差点などの基本的な要素を「環境特徴 (environmental features)」とした。また、「環境特徴 (environmental features)」に特徴的な情報を与え、「指示」と「記述」を明確化する要素「区切り要素 (delimiters)」を分類に加えた。Allen (2000) はこれらの分類に基づいてそれぞれの構成要素が道順説明に及ぼす影響を調べた。その結果、移動の方向が変わる「環境特徴」や、不明確な「環境特徴」での「記述」と「区切り要素 (delimiters)」の下位カテゴリーの「修飾要素 (modifiers)」の使用によっ

て道順説明の有効性が高まることが分かった。

大浜ら（1998）は道聞き談話におけるあいづち系列の談話展開上の機能を調べた。367の道聞き談話を分析したところ、まず道教えが「方向」「手段」「始点」「移動」「行動」「距離」「目印」「着点」「保証」「放棄」という10の情報から構成されていることが明らかになった。これらの情報を「あいづちを誘発する環境」として捉えられるため、環境と呼ばれる。なお、これらの環境は談話展開上に異なっている役割を担うと考えられ、それらの出現頻度と出現順序を調べた。その結果、環境の頻度の違いからそれぞれの環境の必要度が異なること、またそれに基づいて5つのグループに分けられることが分かった。さらに、出現順序の調査から、順序が予測可能である環境とそうでない環境があることが報告された。あいづちに関しては、まず観察されたあいづちを出現する環境によって4つのグループに分類され、その環境の特性からあいづちのグループの特性を考察した。

最後に、Strauss, Katayama, & Eun（2002）では言語類型が全体的な言語的表現（アウトプット）に及ぼす影響を調べるため、日本語、韓国語、アメリカ英語の道聞き談話における目印の情報とともに出現する「ミル」「ミエル」「デテクル」などの視覚的動詞の頻度、分布、使い方を観察した。その結果、韓国語では視覚的動詞が最も多く使われることが分かった。また、日本語と韓国語の場合は視覚的動詞の選択的な使用によって確定性や特異性、予測可能性（意外性）、地理的な近接性という4つの概念が表現できるが、英語の視覚的動詞ではそのような意味が含まれていないことが明らかになった。さらに、英語の道順説明では移動する人に焦点が当てられ、日本語と韓国語では目印に焦点が当てられている傾向が見られた。こちらの違いは言語類型・文法から由来していると考察している。言い換えると、道聞き談話において強調するところ、または強調の仕方は言語類型によって異なることを指摘した。

母語場面の先行研究から道聞き談話における「道順説明」は、研究によって命名が違うが、特定の「操作」（Psathas, 1986）「情報・環境」（大浜ら, 1998）や「構成要素」（村上, 1996; Allen 1997, 2000）から構成されていることが分かった。なお、特定の種類の構成要素の使用によって「道順説明」の有効性が高まると報告している（Allen, 2000）。最後に、言語類型論の観点から道聞き談話の特徴を見た研究では、言語類型によって視覚的動詞の頻度と使用や道順説明で焦点を当てるところが違ってくることが明らかになった。

2.2 接触場面の道聞き談話についての先行研究

接触場面の道聞き談話に着目した研究が少なく、Pearson & Lee（1992）とTaylor-Hamilton（2004）、永田・大浜（2011）が挙げられる。

Pearson & Lee（1992）では、英語の母語場面に加えて接触場面のデータも収集した。道を聞く側の母語話者2名（男1名、女1名）と非母語話者（男1名、女1名、日本と中国の留学生）がそれぞれ50名（男25名、女25名）の英語母語話者に道を聞いて、合わせて200件の道聞き談話を収集した。分析の際、構成と内容の統一性、表現による直接度（directness）とまとめ表現の有無、フォリナー・トーク・ディスコースといった3つの観点に着目し、性別と非母語話者という二要因による影響を探った。その結果、まず道聞き談話は高い統一性を示すことが再確認できたという。性別の要因について、道を教える側の性別より道を聞く側の性別の方が道聞き談話のいくつかの特徴に影響を及ぼすことが分かった。また、道を聞く側の非母語話者に対して「と思う」などの「ヘッジ（hedge）」が少ない、会話終了部の出現数が多いといった2点の違いが観察された。つまり道を聞く側の非母語話者は、道を教える側への調整があるが、少ないという。

Taylor-Hamilton（2004）は道を教える側に着目し、英語母語場面とアラブ首長国連邦のアラビア語母語場面、アラブ首長国連邦英語学習者の英語接触場面を比較した。英語母語話者とアラビア語母語話者、アラブ首長国連邦英語学習者それぞれに口頭で道順説明をしてもらった。その結果、英語母語場面とアラビア語母語場面の道を教える側と比較すると、アラブ首長国連邦の英語学習者がいくつかの異なった戦略を取るということが明らかとなった。左や右という相対的な方向を多用すること、英語母語場面とは異なり通りの名称を使用しないこと、また両方の母語場面では目印が最も多く使用されるのに対し、アラブ首長国連邦英語学習者にはそれらが見られなかったと報告されている。このことから普遍的な性質を持つと見なされている道聞き談話には文化的な側面から異なる場合もあると述べた。また、命令法と相対方向のみから構成する、単純化された多くの英語教科書の会話が学習者の混乱の原因であることも考えられると指摘した。

永田・大浜（2011）は日本語の道聞き談話における道を聞く側の「繰り返し」、「言い換え」、それらに対しての道を聞く側の反応に焦点を当て、母語場面と接触場面の比較分析を行った。データとなったのは、9名の日本語母語話者の道を聞く側による184の談話と10名の上級日本語学習者の道を聞く側による180の談話である。分析の結果、母語場面の場合、まず日本語母語話者の道を聞く側が道教えて提示された情報によって「繰り返し」と「言い換え」を使い分けていることが分かった。それらの「繰り返し」と「言い換え」に対して、母語場面の道を教える側の反応からは、「繰り返し」の場合、情報の理解が十分であるものとして、「言い換え」の場合、情報の理解が不十分であると解釈していることが明らかになった。接触場面に関して、道を聞く側の上級日本語学習者には「繰り返し」と「言い換え」の使い分けが見られず、また道教える側も、母語場面のような、「繰り返し」と「言い換え」に対しての異なる反応はそれほどなく、「繰り返し」「言い換え」とともに情報の伝達が不十分であると解釈し、新たに情報提供をしている傾向が観察された。

接触場面の道聞き談話についての研究から、道を聞く側が非母語話者の場合は母語場面に比べて「ヘッジ (hedge)」が少なくなり、会話終了部の出現数が多くなるという違いが見られた (Pearson & Lee, 1992)。また、道を教える側の学習者は母語または目的言語の場面と異なる戦略を取るということが分かった (Taylor-Hamilton, 2004)。なお、日本語の道聞き談話における道を聞く側の「繰り返し」と「言い換え」に関して、日本語学習者の場合は母語話者のような使い分けが見られず、またそれに対しての道を教える側の反応が新たな情報提供であり、母語場面と異なる結果が得られた (永田・大浜2011)。

先行研究では道順説明において構成要素の種類と量が重要な役割を果たすことが明らかになった (Allen, 2000)。また、接触場面は母語場面と異なる特徴を示すことが示唆された (Pearson and Lee, 1992; Taylor-Hamilton, 2004; 永田・大浜, 2011)。日本語の道聞き談話における道順説明の構成要素はまだ十分に研究されていない。また、道を聞く側が非母語話者である場合、道順説明の構成要素が変わる可能性があるため、母語場面に加えて、接触場面の構成要素を見る必要がある。

そこで、本研究は自然会話に近い日本語の道聞き談話の母語場面と接触場面のデータを基に、それぞれの道順説明の構成要素を明らかにし、比較分析を行うことを目的とする。

3. 研究課題

以上の点を踏まえて次の研究課題を立てた。

- RQ1 日本語の母語場面の道聞き談話における道順説明の構成要素はどのようなものか。
- RQ2 日本語の接触場面の道聞き談話における道順説明の構成要素はどのようなものか。
- RQ3 日本語の母語場面と接触場面の道聞き談話における道順説明の構成要素はどう違うか。

4. 研究方法

4.1 調査方法

4.1.1 調査資料及び調査対象者

本研究では実際の生活で起こりうる、大学のキャンパス内での道聞き談話を想定し、一人の道を聞く側と一人の道を教える側の会話を収集した。道を教える側は調査が行われる大学に所属する大学生で、道を聞く側はその大学に來たことがない他大学の学生、及び留学生である。本調査では面識のない通行者に道を聞く場面を想定したため、会話の参加者のペア同士は初対面である。また、道聞き談話では、説明されるルート of の長さや形は談話の流れに大きな影響を及ぼすと考えられるため、ルートを統一した。調査は2015年7～2016年5月に都内の大学のキャンパス内で実施した。母語場面と接触場面それぞれ10組ずつ（計20組）のデータを収集した。母語場面の会話参加者は、道を教える側の日本語母語話者（以下DGN¹とする）10名と、道を聞く側の日本語母語話者（以下JNSとする）10名である。接触場面の会話参加者は、道を教える側の日本語母語話者（以下DGCとする）10名と、道を聞く側の、日本滞在歴1年以内の中級日本語学習者（以下NNSとする）10名である²。道聞き談話は多くの場合、初級の授業で扱われるため、本調査の留学生は初級を終えた学習者、つまり中級日本語学習者で

ある。

4.1.2 調査手順

本調査の手順は以下の通りである。道を聞く側は控室で調査者による本研究の目的や調査手順についての説明を受け、ICレコーダーを付けて待機する。道を教える側は出発点のところで調査者による本研究の目的や調査手順についての説明を受けて同じく待機する。道を聞く側は出発点のところまで行って、道を教える側と会話をし、会話が終わった後、道を聞く側は目的地まで行く。

4.2 分析方法

本研究は道聞き談話の「道順説明」に着目し、まずは道順説明のすべての発話を Allen (1997) の分類に沿って「指示」と「記述」という道順説明の構成要素に大別する。次に、「指示」と「記述」に含まれる始点、目印、経路、交差点、着点などの「環境特徴」をすべて「環境特徴」として数える。最後に「指示」と「記述」に現れる「区切り要素」を4つの下位カテゴリー、「距離指定 (distance designations)」「方向指定 (direction designations)」「関連語 (relational terms)」「修飾要素 (modifiers)」に分類する。なお、道を教える側の質問、道を聞く側のクローズド・クエスチョンに対する応答、または Myers Scotton & Bernsten (1988) に沿って道順説明とは直接関係ない発話を分析から除く。

表1は前述した Allen (1997) 分析枠組みをまとめたものである。表1の分析枠組みに沿って道順説明を分類する。

表1 道順説明の構成要素 (Allen, 1997)

	定義	本調査で見られた例
指示 (directives)	行動の指示 移動や行動の動詞を含む	右に曲がって まっすぐ行くと で階段を下りて
記述 (descriptives)	「環境特徴」の空間関係を表す 存在動詞「アル」や視覚的動詞「ミ エル」を含む	下りると道があるんですけど 食堂が見えてくるので
環境特徴 (environmental features)	道順に沿って現れる目印、経路、交 差点など	で階段を下りて えっとそうすると右手に大きな通りがある んですよ
区切り要素 (delimiters)	「指示 (directives)」と「記述 (descriptives)」を明確化する 「環境特徴 (environmental features)」 について特徴的な情報を与える	【方向指定 (direction designations)】 右に曲がって まっすぐ行くと 【関連語 (relational terms)】 食堂の横の階段下りる 【距離指定 (distance designations)】 すぐ見えます そちらをずっと歩いてもらって 【修飾要素 (modifiers)】 えっとこの あの <u>ちっちゃい</u> 階段の ぼってもらって

5. 結果

表2は母語場面と接触場面中に現れた「指示」と「記述」の構成要素の出現回数をまとめたものである。「指示」と「記述」に含まれている「環境特徴」及び「区切り要素」の下位カテゴリーの出現回数は、表3に示すとおりである。

表2 「指示」と「記述」の出現回数（比較）

	「指示」	「記述」	合計
母語場面	131 (56%)	101 (44%)	232 (100%)
接触場面	112 (67%)	56 (33%)	168 (100%)

表3 「環境特徴」と「区切り要素」の下位カテゴリーの出現回数（比較）

	「環境特徴」	「区切り要素」				「指示」と「記述」 の合計
		「方向指定」	「関連語」	「距離指定」	「修飾要素」	
母語場面	165 (71%)	61 (26%)	42 (18%)	14 (6%)	78 (34%)	232 (100%)
接触場面	107 (64%)	70 (42%)	29 (17%)	13 (8%)	33 (20%)	168 (100%)

表2から見るように、母語場面の場合、まず「指示」と「記述」の要素の合計の出現回数は232回、「指示」は131回（56%）、「記述」は101回（44%）である。母語場面では「指示」の割合の方が高いが、「記述」の割合も50%に近い。次に目印、経路などの「環境特徴」の出現回数について、表3を見ると、母語場面の出現回数は165回であり、71%の「指示」と「記述」に「環境特徴」が含まれている。「区切り要素」の下位カテゴリーに関して、母語場面では「修飾要素」の出現回数が78回で一番高く、次に「方向指定」が61回、「関連語」が42回、「距離指定」が14回観察された。

接触場面の場合、「指示」と「記述」の要素の合計の出現回数は168回であり、「指示」は112回の出現で67%を占めている。「記述」は56回（33%）であり、これは「指示」の割合の半分である。接触場面の「環境特徴」は107回であり、64%の「指示」と「記述」に「環境特徴」が含まれている。最後に「区切り要素」の下位カテゴリーの出現回数について、接触場面では「方向指定」が70回で最も多く、次に「修飾要素」33回、「関連語」29回、「距離指定」13回の順になっている。

両方の場面を比較すると、まず「指示」と「記述」の要素の合計の出現回数に関して、母語場面では出現される要素の数が多いたことが分かる。また、両方の場面では「記述」より「指示」の出現回数の方が多いことが分かる。それぞれの場面の「指示」と「記述」の構成要素に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、「記述」の構成要素において有意差が見られた ($t(18)=2.951, p<.05$)。「記述」の出現回数と同じく、母語場面では「環境特徴」という構成要素が多く使われ、接触場面の「環境特徴」の出現回数を有意に上回った (Welchの検定： $t(17.61)=2.345, p<.05$)。最後に両方の場面の「区切り要素」の下位カテゴリーを比較すると、母語場面では「修飾要素」が一番多く出現したことに対し、接触場面の場合は「方向指定」の出現回数が一番高く、「修飾要素」の出現回数は母語場面の半分であることが分かる。母語場面と接触場面のそれぞれの「区切り要素」の出現回数の平均値を t 検定により比較したところ、母語場面の「修飾要素」の出現回数が有意に高いことが分かった ($t(18)=2.517, p<.05$)。

6. 結果のまとめ及び考察

本研究では日本語の母語場面と接触場面の道聞き談話における道順説明の構成要素を調べた。本研究の結果を場面毎にまとめてみると、母語場面の特徴としてはまず、「指示」と「記述」に関して、「指示」の出現回数の方が高いが、「記述」がそれに近い割合で出現することが挙げられる。次に、殆どの「指示」と「記述」の構成要素に「環境特徴」が含まれていることが分かった。さらに、「区切り要素」の下位カテゴリーに関して、「修飾要素」の出現回数が顕著である。一方、接触場面の場合は、「指示」の出現回数は「記述」の倍であること、また「指示」と「記述」に含まれている「環境特徴」の割合が高いことが分かった。なお、「区切り要素」の下位カテゴリーに関して、「方向指定」が一番多く出現することが明らかになった。

母語場面と接触場面を比較してみると、両方の場面の共通点として「指示」の出現回数の方が多いが、「記述」の割合も高いこと、また殆どの「指示」と「記述」に「環境特徴」が含まれていることが挙げられる。相違点について、

それぞれの構成要素の出現回数を比較したところ、母語場面の「記述」「環境特徴」「修飾要素」の出現回数が有意に高いことが明らかになった。つまり、道を聞く側の所属が変わると、構成要素の出現回数も変わることが分かった。

道聞き談話の道順説明では「まっすぐ行って」「右に曲がって」などの「指示」は基本的な構成要素として捉えることが多いが、ここで「図書館が見える」「食堂がある」などの「記述」の重要性も浮かがる。「記述」には環境特徴の位置や環境特徴の空間関係（例：食堂の右側、図書館の前）についての情報が含まれているため、目的地まで行くとき、道を聞く側にとって自分の位置を確かめるための重要な助けになると報告されている（Allen, 1997）。次に、「環境特徴」について、先行研究で示されたように（Allen 1997, 2000; Denis, 1997）道順説明において「環境特徴」は必ず出現する、重要な役割を果たす要素である。本研究の母語場面でも「記述」と「環境特徴」の出現回数が多く、先行研究と同じ結果が見られた。なお、母語場面の「区切り要素」の下位カテゴリーの「修飾要素」の高い出現回数に関して、Allen（2000）で明らかになったように、「修飾要素」の使用によって道順説明の有効性が高まるため、本研究では同じ理由で「修飾要素」が使用されると考えられる。Allen（2000）は、移動の方向が変わる「環境特徴」や不明確な「環境特徴」での「記述」と「修飾要素」が出現すると報告している。同じく、Denis（1997）では方向が変わるところで目印が多くなり、目印の描写も多くなることが分かった。会話例1では発話13で説明されているところが不明確で間違った方向を選ぶ可能性があるため、道を教える側のDGNが「修飾要素」を使用し、特定しやすくしようとしている。

会話例³ 1：母語場面10

- 11 DGN そこおりてもらって
 12 DGN でおりと右側に
 →13 DGN ちよつと開けた 椅子とかある 広場みたいなところがあるので
 14 JNS はい
 15 DGN でそれを右に見たまままっすぐ 建物に沿って
 16 DGN こう： 道なりに行ってもらうと

接触場面の場合、道順説明が殆ど「指示」から構成されているが、道順説明の有効性を高める「記述」、また道順説明において重要な役割を果たす「環境特徴」も観察された。なお、「区切り要素」の下位カテゴリーに関して、「方向指定」が一番多く出現することが明らかになった。

Denis（1997）はまず収集した道順説明からのすべての構成要素を含む道順説明（megadescription）を作成し、そして参加者にその道順説明（megadescription）から最も重要な構成要素を抽出してもらったところ、直進を表す動詞と、付随的な目印、目印の描写が削除され、主に目印を含む「指示」が選択されたと報告している。同じく、本研究の接触場面の道を教える側のDGCは最も重要な構成要素を選択し、「右」「左」「まっすぐ」などの「方向指定」と「環境特徴」を含む「指示」から道順説明を構成していると考えられる。このようなストラテジーによって道順説明の有効性を高めるとのことより、NNSの情報処理の負担を減らそうとしていると考えられる。

道順説明のまとめのとき、このようなストラテジーの例が見られた。会話例2から見えるように、接触場面の道を教える側のDGCが主に「方向指定」や「環境特徴」を含む「指示」を使用することが分かる。

会話例2：接触場面9

- 22 DGC h h hなのでまっすぐ行ってもらって
 23 DGC 階段下りてもらって
 24 DGC 右曲がってもらって
 25 NNS はい
 26 DGC まっすぐ行って右です

両方の場面では「記述」と「修飾要素」の出現割合が高い理由としては、本研究の道を教える側が道順をよく知っており、道順に沿っての「環境特徴」をよく知っていることが考えられる。両方の場面では道順説明の有効

性を高めるため、「記述」と「修飾要素」を使用しているが、出現回数から見ると、母語場面の「記述」「環境特徴」「修飾要素」において有意な差が見られた。その理由として、接触場面の道を教える側のDGCはまず全体的な情報量を減らし、不要な情報を削除して、また「右」「左」「まっすぐ」などの「方向指定」を含む「指示」から道順説明を構成することによって、NNSの情報処理の負担を減らそうとしていると考えられる。情報処理の負担を減らすため、接触場面ではそれらの構成要素を減らしていると考えられる。

両方の場面においてAllen (2000) とDenis (1997) で示されたように「記述」と「環境特徴」の重要性が再確認できた。しかし、本研究では道を聞く側が日本語学習者であることによって道順説明の構成要素の種類と出現回数が変わることが示唆された。母語場面の場合、道順説明の有効性を高めるため、「記述」「環境特徴」「修飾要素」の出現回数が高くなるが、接触場面では「方向指定」を含む「指示」の使用という異なるストラテジーが見られた。

7. 今後の課題

本研究では道聞き談話の構成要素に着目して、日本語の母語場面と接触場面の比較分析によって、それぞれの場面の特徴が明らかになった。しかし、今回の調査対象者の人数が少なく、一般化した結論を導き出すことが出来ない。調査対象者をさらに増やして、また道順そのものの特徴からの影響を防ぐため、異なる道順の説明のデータを収集し、詳しく分析していきたい。

註

1. 母語場面では道を教える側をDGN (Direction Giving Native situation)、道を聞く側をJNS (Japanese Native Speaker) とする。接触場面では道を教える側をDGC (Direction Giving Contact situation)、道を聞く側をNNS (Non-Native Speaker) とする。
2. NNSの国籍はイギリス人1名、イタリア人1名、オーストラリア人1名、クロアチア人1名、ドイツ人2名、フランス人2名、ポーランド人2名である。
3. 会話例に現れた記号：「:」は引き延ばし、「h」は呼気音を示す。

参考文献

- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太 (1998) 「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』 96, 73-84.
- 永田良太・大浜るい子 (2011) 「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の比較—「繰り返し」と「言い換え」に着目して」『教育学研究ジャーナル』 8, 41-50.
- 村上恵 (1996) 「「道順説明」の構成要素と表現類型」『三重大学日本語学文学』 7, 94-30.
- Allen, G.L. (1997). From knowledge to words to wayfinding: Issues in the production and comprehension of route directions. In S. Hirtle and A. Frank (Eds.), *Spatial information theory: A theoretical basis for GIS*. Berlin: Springer-Verlag, 363-372.
- Allen, G.L. (2000). Principles and Practices for Communicating Route Knowledge. *Applied Cognitive Psychology*, 14(4), 333-359.
- Denis, M. (1997). The description of routes: A cognitive approach to the production of spatial discourse. *Cahiers de Psychologie Cognitive*, 16(4), 409-458.
- Myers Scotton, C. & Bernsten, J. (1988). Natural Conversations as a Model for Textbook Dialogue. *Applied Linguistics*, 9(4), 372-384.
- Pearson, B. & Lee, S. (1992). Discourse structure of direction giving: Effects of native/nonnative speaker status and gender. *TESOL Quarterly*, 26 (1), 113-127.
- Psathas, G. & Kozloff, M. (1976). The structure of directions. *Semiotica*, 17(2), 111-130.
- Psathas, G. (1986). The organization of directions in interaction. *Word*, 37, 83-91.
- Taylor-Hamilton, C. (2004). Giving directions as a speech behavior: A Cross-cultural comparison of L1 and L2 strategies. In D. Boxer & A. D. Cohen (Eds.), *Studying speaking to inform second language learning*. Clevedon, England: Multilingual Matters, 149-173.
- Strauss, S., Katayama, H. & Eun, J. (2002). Grammar, cognition, and procedure as reflected in route directions in Japanese, Korean, and American English. In N. Akatsuka & S. Strauss (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics Volume 10*. Stanford, CA: CSLI Publications, 104-117.

Wunderlich, D. & Reinelt, R. (1982). How to get there from here. In R.J. Jarvella & W. Klein (Eds.), *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*. New York: John Wiley and Sons, 183-201.